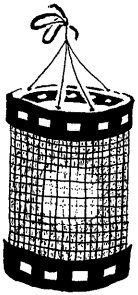
震災後の子どもたち(3)

『震度1、震度2、震度3…』

南　佑子



はじめに

一月十七日未明、阪神淡路大地震が神戸を襲った。震度七という激震により、私の前任園（御影幼稚園）は全壊してしまった。

この園は、創立百周年を数える歴史の古い幼稚園である。戦災で焼失し、その後再建されて四十五年を経た木造の園舎であった。

子どもたちの消息を求めて

震災直後から電話はほとんどかからず、交通網は途絶、二輪車・徒歩しか交通手段のなかった中で、何等かの方法でやっと出勤してきた職員と共に子どもたちの消息を求めてあちこち尋ね歩いた。御影の町は跡形もなく壊滅状態で、倒壊家屋が道をふさぎ、鉄道の高架は垂れ下り歩くのも困難な状態で

あった。個々の子どもたちの家を訪ねて全員の安否を確かめるのは不可能な状況であったので、取り敢えず避難所にあてられている近隣の小中学校に行ってみた。やっとたどり着いた避難所で会った子どもたちは、恐怖と異常な状況のためか黙りこくり、ひきつった表情を見せていた。言葉をかけると「先生」とそれでも笑顔を見せてくれたが、ショックの大きさがその表情からよみとれ、事態の深刻さが窺われた。

子どもたちの自宅は過半数が全半壊しており、全員の消息がつかめたのは震災から一週間余り経ってからであった。

幼稚園の再開

私達は子どもたちの恐怖や緊張感が和らげばと思い、遠方に疎開している子どもたちには電話や手紙で、避難所にいる子どもたちは度々訪問して励ました。しかし、訪ねる度に子どもたちの表情が暗くなっていくのが気がかりであった。公園や学校の運動場は避難者のテントや車があふれ、道路は歩くのさえも危険で、遊び場や遊び友達をなくした子どもたちに元の活気を取り戻させるためには、一日も早く幼稚園を再開し、そこで楽しく過ごさせることが何より大切なことではないかと考えた。隣接する小学校はどの教室も避難者で一杯であったが、学校側のはからいで市民図書解放教室を借用することができ、安全点検を済ませた後そこで保育を再開することにした。

再開当日登園できたのは八十一人中二十八人であった。保護者同士は涙の再開であったが、子どもたちは友達と抱き合ったり、肩をたたき合ったりして、久しぶりの再会を喜んでいた。

五歳の子どもがこんなにも友達や幼稚園を大切に思い、登園することを楽しみにしている、幼稚園が子どもの生活の中心になっていたことを改めて知った思いがした。

幼稚園再開の三日前には隣接する小学校も再開されていた。まだ水道やガス等のライフラインが復旧していなかったが、幼稚園、学校の再開に伴い疎開先から自宅に帰ってきた子どもも多く、登園する子どもの数は日を追って増えてきた。なかにはどうしても友達に会いたいからと大阪・尼崎・三木・三田市などの疎開先から一時間余りもかけて園に通ってくる子どももあった。

大阪市に疎開しているT君は朝起きるのが苦手であった。しかし、震災後は朝六時には目を覚まし、身支度をすませ「さあ、幼稚園に行こう」と登園をせがむのだという。このように子どもたちの熱意にほだされて遠方からバスや電車を乗り継ぎ、幼稚園に子どもを連れてきた保護者も多かった。保護者自身も、幼稚園で教師や顔見知りの保護者と話し合ったり励まし合ったりすることが楽しみであったようだ。幼稚園が保護者にとっても心の安定の場となっていたような気がしている。

救急車　大きらい！

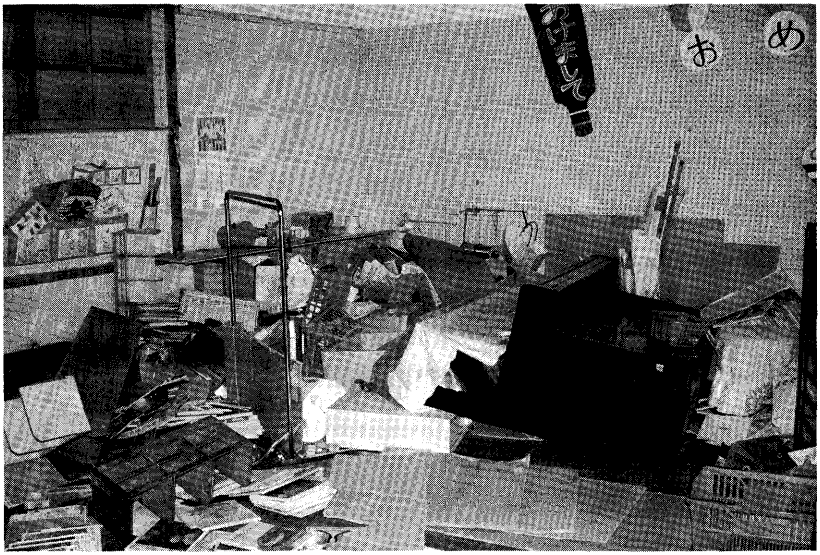
三月になったある日のこと。砂場で友達と仲良く遊んでいたT子。救急車のサイレンが聞こえてくると「私、救急車大きらい！」と両手で耳をふさいで保育室に駆け込んできた。

震災後ひっきりなしに聞こえていた救急車のサイレンとヘリコプターの音は耳について離れない。このようにサイレンやヘリコプターの音には異常に反応する子どもがある。これらの音を聞くと、地震の恐怖と当時のあの緊迫した雰囲気を思い出すからなのであろう。

また、S君のように「毛布大きらい」という子どももいる。亡くなられた方の遺体を毛布で覆っていたからだという。夜寝る時今でも決して毛布を使わないそうである。

大方の子どもたちは寝ている上に家具やテレビが落ちてきて、暗やみの中で恐怖を味わった。震災以

▲倒壊した木造園舎



▲ピアノが転倒し、ミキサーでかきまわされたようになってしまった室内

後、家庭では子どもたちに次のような変化が見られたようだ。

・暗闇を極端に恐がり、電気をつけていないと寝られない。
・地震や火事に関する遊びをしたり、絵をよくかいたりする。
・ちょっとしたことで泣いたり、幼児語を使ったり等赤ちゃん返りが見られ、わがままになった。

これらの症状は地震のストレスからくるものであり、専門家からも指導を受けながら、幼稚園では十分にスキンシップを図り、不安を取りのぞくように努めた。

不自由な生活の中でも

ブランコに乗っているA子、「震度1、震度2、震度3…」といいながらブランコを揺すっている。子どもたちは覚えた言葉を素早く遊びに取り入れていく。「給水車」「避難所」「救援物資」「ボランティア」。この度の震災を通して、このような耳慣れない言葉をうまく使って遊んでいる。子どもたちの明るさ、たくましさに、ともすれば落ち込みそうになる私達は多いに励まされ、力づけられたような気がする。

「先生、私とこお家みつかってん。六人でギューギュー詰め」「僕とこの家、昨日解体やってん。でも、車助かって良かったってお父さんいってた」「昨日ガスきてん。お風呂に入れて気持ち良かったよ」等と震災後、子どもたちはこのようなことをよく私達に話してくれた。子どもたちは環境に敏感に反応して生活している。そして家族の喜びが子どもたちの心を明るくする。子どもながらに家のことがやはり一番の関心事だったのであろう。

おわりに

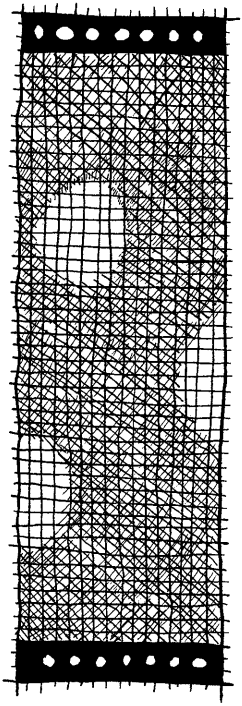
震災後七か月が経過し、子どもたちは表面的には以前と変わりがないように見える。

しかし、七月七日の七夕祭りの笹飾りの短冊には『もう一生地震がきませんように』『こわい地震がきませんように』等と地震に関する願いを書いているものを多く見かけた。

また、先日ある精神科医から、最近チック症状がひどいと診察を受けにくる子どもが増えているという話も聞いた。この子どもたちの心の傷が完全に癒えるのにはまだまだ時間がかかるだろうと思う。

私はこの子どもたちと同じ年齢であった昭和二十年の三月十七日、神戸大空襲の戦火に追われて町中を逃げまわった体験をもっている。

今振り返ってみると、この時とこの後の苦しかった体験が、私の生き方に強い影響を与えたように思われてならない。

この震災というつらく恐ろしい出来事に遭遇した子どもたちが、挫けず、この体験をバネにして、強く、逞しく生きていってほしいと願っている。

（神戸市立神戸幼稚園）